

〔研究紹介〕

『夜の寝覚』研究

—対の君と『落窪物語』あこぎを比較して—

人文科学専攻・文学文化論コース
修士課程2年 相磯 詩音乃

1. 研究の背景

平安時代後期の物語である『夜の寝覚』は、女君と男君の悲恋を中心に、女君の人生を描いた物語である。

『夜の寝覚』は、作者が女君の精神的成長を描いている物語であるということが通説となっており、中間欠巻部や末尾欠巻部があるものの、巻一から巻五の長編の中で生じる様々な事件を通し、女君は精神的に成長している。また、精神的な成長を読みとるために重要である、女君を中心とした人物の心情描写が評価されている。この女君を語る上で欠かせないのが対の君である。

対の君は、女君と従姉妹の関係であるものの、女君の幼少期から女房として支え続け、女君が寝覚の君として成長した後も、女君の代わりに参内し、督の君（女君の義理の娘）を支えるなど、女君に仕える女房である。

女房は、外に出ることができない女君に代わり、外の人物と関わり、対話をして物語を発展させる「情報の媒介者」という役割があることが千野氏^{*1}によって指摘されている。また、野口氏^{*2}によると、対の君の「活躍場面は、第一部に限られる。そして、その役割はヒロインの代行者で」あり、「対の君の任務は、その姫君に代わって決定し、行動することである。」「必死に考え、誠実に行動して」いるが、「当時の貴族社会で、姫君の貢献役に期待される理想的な者であった。それだけに、当時の社会通念にいささかもはみ出す者ではなかった。そこには、本来の意味で個性と見なされるような性格は存しない。」と述べられてある。こういった意見が通説となっているためか、対の君は、女君や男君と比較すると、その人物に注目した論は少ない。

2. 研究の方向性

上記のように、対の君に注目した先行論は少ないが、女君が精神的成長を遂げたのは、様々な事件が生じるきっかけとなった男君の存在だけではなく、女君の後見として、世話をしていた女

*1 『女房たちの王朝物語論「うつほ物語」「源氏物語」「狭衣物語」』千野裕子、青土社、2017

*2 『夜の寝覚研究』野口元大、笠間叢書、1990

房の対の君の存在も大きいと考える。そのため、対の君に注目する重要性は高いと考えられるのではないか。

特に、対の君には会話表現と心内表現に特徴があると考え。その特徴は、係助詞・助動詞・終助詞・間投助詞の使用頻度にあると考えられる。

横溝氏^{*3}は、『夜の寝覚』が書かれる際に、平安中期に成立した『落窪物語』が文章の構成に影響を与えていると指摘している。この研究を受けて、現在執筆中の修士論文では、その登場人物である「あこぎ」と対の君の係助詞・助動詞・終助詞・間投助詞の使用頻度を比較する。

会話表現と心内表現の比較を行うことで、対の君の特徴を明らかにする計画である。

*3 『落窪物語』と『夜の寝覚』の〈事件〉—平安朝物語文学史の再構築に向けて— 横溝博、『国語と国文学』、2021